

19世紀末ドイツの女性作家における母と娘の関係-ルー・アンドレアス=ザロメとフランチスカ・ツー・レーヴェントローを例として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広沢, 絵里子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5108">http://hdl.handle.net/10291/5108</a>

## 19世紀末ドイツの女性作家における 母と娘の関係

——ルー・アンドレアス＝ザロメとフランチスカ・  
ツー・レーヴェントローを例として——

広 沢 絵里子

英米やドイツではすでに多くの重要な成果が出ているものの、「母と娘」という女性の系譜を問う文学実践、あるいは文学研究のありかたは、その基礎となる理論も方法も私たちにとってまだ比較的なじみが薄い<sup>1)</sup>。文学研究にとって「母娘関係」とは、まずひとつのテーマ研究であり、もちろんそれは、作品のジャンルや、語りの方法など、作品の形式面に関する分析や、文学史との関連において行われる。しかし、最近の研究の特色は、文学研究という枠にとどまらずに、文学作品に描かれた母娘関係の分析をもとに、社会史・心性史における新たな認識を得たり、女性の社会化・心理的發展・精神分析モデルを考察してゆく点にある。あるいは、「母娘関係」は個々の女性作家に関する伝記的研究において、重要なアスペクトのひとつとなってくる。

「母娘関係」に関する研究が、アクセントの置き方によって上述のような様々な方向を採りうる点は、多くの他のテーマ研究と同様である。しかし、「母娘関係」というテーマを扱うこと自体に政治的な意味合いがこめられる点には留意する必要がある。1970年代以降の欧米でこのテーマが注目を集め始めたのは、フェミニズムの影響なくしては考えられない。ドイツ語圏では男女の著名な作家たちがこぞって、家族における母親と娘の葛藤を中心に据えた作品を発表している<sup>2)</sup>。また、文学研究においては、それまでの伝統

の文学研究で重要な地位を占めてきた「父・息子関係」に対立させるように、「母と娘」という女性の系譜・世代間抗争を問題化する動きが出てきた。実際、神話を始めとして「母娘関係」をテーマとした物語は数多く生み出されてきたにもかかわらず、このテーマはほとんど着目されないまま、研究上の空白地帯になっていたからである。ハイディ・M・ミュラーの興味深い指摘によれば、同時代の読者からも支持され、今日もなお評価の高い近・現代のドイツ語圏の男性作家たち（フォンターネ、Th. マン、C.F. マイヤー、ヨーゼフ・ロート、シュニッツラー）は、印象的な母娘関係を描きこんだ作品を残してはいるが、たいていの場合その作品によって有名になったのではない<sup>3)</sup>。

ところで「母と娘」に着目して具体的作品や女性作家の個人史にあたってみると、そこには調和的・ユートピア的な関係よりも、深刻な葛藤や断絶が表現されていることが多い。本論がとりあげる二人の女性作家 — ルー・アンドレアス＝ザロメ (1861-1937) とフランシスカ・ツー・レーヴェントロー (1871-1981) — の個人史も、その例にもれない。リユース・イリガライは母と娘の関係についてこう定式化する — 父権制の確立は、娘が母親と自分の家族から別れて夫の系譜に組み入れられることを意味するのであり、母と娘の間の愛は「父権制が不可能にしてしまった」と<sup>4)</sup>。アンドレアス＝ザロメとレーヴェントローは、特定の男性（の系譜）に帰属することを結果的に拒んだ女性たちであるが、彼女ら娘たちと、夫の系譜に属することを受け入れた母親世代の女性たちとの間に横たわる断絶は大きい<sup>5)</sup>。これは言ってみれば一つのパラドクスである。母親に反抗し、家を飛び出していった娘たちこそ、彼女らを受け入れ、理解してくれる母親を望んでいたのだが、母親側は、道に外れた娘たちと簡単に和解するわけにはいかなかった。

19世紀後半から今世紀初頭、ヨーロッパにおける第一次女性運動の影響によって女性の意識・社会的地位・家庭での役割などに激変が起こりつつあった時代を生きたこの二人には、出自や政治的（ないし非政治的）立場に共

通点がある。1980年代、ドイツでの女性作家研究の初期段階においては、彼女たちはまず、性解放の先駆的な存在として注目をあびたが<sup>6)</sup>、本論は、これとは異なったアプローチの一つとして、二人を母親世代とはまったく違う生き方をした「娘たち」の例としてとりあげ、彼女たちが自らの母親体験と母親像を、日記、書簡、自伝的テキストにおいてどのように定着させていったか考察してゆきたい。

### 1. 母親体験の記録 — 葛藤と断絶

アンドレアス＝ザロメとレーヴェントローが生を受けた19世紀後半は、市民社会の生活規範や性道徳、男女の性別による役割分担が、すでに貴族階級や労働者家庭など、他の社会層にも浸透していた時代である。アンドレアス＝ザロメとレーヴェントローが上流貴族の出身であるとはいえ、彼女たちの人生は、市民的生活規範、道徳、教育理念によって定められた理想的女性像との対決抜きには考えられない。また、19世紀後半は、1848年の革命期に端を発する組織的な女性運動の時代でもあった。運動の中心となったのは、市民階級の女性たちだが、彼女たちの運動に平行して、プロレタリア女性による、社会民主党を中心とした女性運動も展開される。市民女性の女性運動は、「良家の娘」に高等教育の道を開き、就業の可能性を拡大することに力を入れていた。レーヴェントローが女性教員養成学校へ通い、教員資格を取ったことや、アンドレアス＝ザロメがチューリヒ大学に入学したことは、ヨーロッパにおける女性解放の大きな流れと無縁ではない。

しかし、アンドレアス＝ザロメとレーヴェントローは、組織的女性運動には関与しなかった点で偶然にも一致していた。アンドレアス＝ザロメは1899年に発表したエッセイ「現代女性に対する異端表明 (Ketzerien gegen die moderne Frau)」の中で、「女性性 (Weiblichkeit) は一つの喜ばしい開花である [中略] しかしそれは、規定された運動による強制収容所のような

ものではない」と述べ、女性運動を拒否する<sup>7)</sup>。また、レーヴェントローも、同じく1899年に発表したエッセイ「女傑か遊女か (Viragines oder Hetären)」において、「それ [=女性運動] は、明らかにあらゆるエロスの文化の敵である、というのも、それは女たちを男性化しようとするからだ」と書いている<sup>8)</sup>。レーヴェントローの求める女性解放とは、女性が自らの性を自由に享受できることだった。彼女は、キリスト教的モラルに裏付けられた婚姻制度に対抗して、古代ギリシャのヘタイラの世界を現代に呼び戻すべくアピールしている。

さて、アンドレアス=ザロメとレーヴェントローは、いずれも断固として「自由」を主張し、自分の人生に自己決定権を持って、学芸の世界に自己実現を求めた人たちである。そうした彼女たちの自立への過程には、母親との激しい葛藤があった。二人の母親は、いずれもその時代の上流家庭の女性に課せられた母親としての役割を、自覚的に果たしていたと想像できる。つまり、家政を管理し、子供たちを厳格にしつけ、社会の規範と要請に沿うよう育て上げて社会に送り出す、という役割である。この点では、アンドレアス=ザロメとレーヴェントローの母親は、市民社会がイメージする「母親の役割」を申し分なく忠実に遂行していた。しかし、それだけに、娘が家・家族の領域を離れて自由主義的にふるまうことは、母親世代にとっては当時の因習から大きく逸脱することを意味する。

また、アンドレアス=ザロメとレーヴェントローの場合、母と娘の間に情緒的な交流が乏しかったことが目立つ。貴族家庭の通例にもれず、子供に養育係が付くため、母子の直接の触れ合いが少なかったことも一因だが、レーヴェントローは、自分の母親の冷淡さと無理解に常に苦しんでいたし、アンドレアス=ザロメも母親を「感情を表に出さない」人として描写している<sup>9)</sup>。

レーヴェントローは19歳の頃知り合った、ほぼ同年代のボーイフレンドと熱心な文通をしていた。この文通は、権威主義的で身分と体面ばかりを重

んじる家庭で、窒息しそうになっているレーヴェントローの、唯一の避難場所だった。そこでは、おてんばで強情な娘を冷淡に突き放す母親の姿と、母に反抗しながらも、母親の理解と愛を求めている若い娘の様子が伺える。「以前なら、私は自分の母を情熱的に愛していたし、彼女に愛されたい、あるいは少なくとも他の人と同じように親切に扱ってもらいたいと、文字どおり願ってやみませんでした。しかし、その願いもだんだんに擦り減って冷めてしまい、私たちの間は、ほとんど戦争状態です。」<sup>10)</sup>「私はあなたに、私たち親子の関係を大げさに言っているわけではありません。母親の愛情を、私はほとんど知りません。そんなものを感じたことは、ほとんど一度もないのです。ただ冷たさだけです。一番良くて、それは冷淡な親切で、事情を知らない人ならたまされてしまうかも知れません。」<sup>11)</sup>

幼少期から活発で、男兄弟と一緒に野外で飛びまわるのが好きだったレーヴェントローは、良家の娘に課せられる花嫁修業や「女子教育」を、窮屈で、自分の生気を奪い取るものとして嫌っていた。彼女と交際のある少女たちは、たいてい「人に依存した状態」であり、「なんの個性も持ち合わせていない」<sup>12)</sup>。彼女は「自分自身 (ein Selbst)」でありたいと願うのだが、「もし若い女の子が自分自身であろうとすると、人はもちろんそれをとんでもないことだと考えます。若い女の子達は、そもそも何者であることも許されません。せいぜい、居間の装飾品か、役に立つペットぐらいでしょう。多くの馬鹿馬鹿しい偏見に制限され、精神修養は完全でないがしろに、いや、できるだけ抑え込まれるのです。彼女らは、最後には無難な男と結婚させられ、家事やその他のことで、完全に墮落してしまうのです。」<sup>13)</sup>

退屈な晩餐会で、しとやかなお嬢様役を演じるどころか、わざと無作法な真似をする若いレーヴェントローに、母親は「非難のまなざし」を向ける<sup>14)</sup>。レーヴェントローは、母から受ける絶え間ない叱責に対して、無関心を装うが、これは子供からの口答えの許されない親子の厳格な上下関係においては、唯一の抵抗の仕方だったに違いない。「母はみんなに私のことを

嘆きますが、彼女は誰かが居合わせる時、もっとも容赦ないのです。でも私は一貫して、そんなことは私にとっては全くどうでもいい、私はとても幸せだ、という顔をしています。この仮面がとても重たく感じられることもしばしばです — でも、うまくいっています。』<sup>15)</sup>

レーヴェントロー家は、13世紀初頭の文書ですでに確認することのできる古い貴族の家柄であり、17世紀から18世紀の間に伯爵の称号を得ている。フランチスカの父、ルートヴィヒ・レーヴェントロー (1824-1893) は、シュレスヴィヒ地区フーズムにおける、最初のプロイセン郡長だった。(ちなみに、一家は1889年にはフーズムの城を引き払い、リューベックに居を移した。) また、母のエミーリエ (1834-1905) は、ランツァウ伯爵の娘であり、ランツァウ家も歴史と格式からいえばレーヴェントロー家と同等であった。両家は著名な政治家、軍人を輩出している。フランチスカの母方のいとこ、ウルリヒ・フォン・ブロックドルフ＝ランツァウは、1919年に外務大臣を勤めてから、モスクワ駐在大使となり、彼と、フランチスカの弟で、長年国会議員を勤めたエルンスト・ツー・レーヴェントローは、「20世紀における最も有名なシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン貴族」だった<sup>16)</sup>。

ランツァウ家の血を引くヨーハン・アルブレヒト・フォン・ランツァウは、フランチスカについての論文の中で、母エミーリエは、娘が言うような冷たい人間ではなかった、と若干の弁護をしている。「親戚の目には、彼女 [=エミーリエ] はむしろ温厚な人柄だったが、たしかに少し考えの狭いところがあった。』<sup>17)</sup>しかしながら、「郡長だった父とその妻が、両親・教育者として、多少分別があったか、あるいは無理解だったか、という問題には関係なく、ファニー [=フランチスカの本名] は、どんな普通の、市民的な家にもおさまらなかつただろう。彼女は子供の頃から手に負えない、自由奔放な気性だった。』<sup>18)</sup>ランツァウも引用している通り、たしかにレーヴェントローは、「どんな小さな足かせ」も耐え難いと感じており、自分を自由の身にして、「自分自身」を救わなければ、破滅するとさえ言っている<sup>19)</sup>。母親

が冷淡であったか、温厚であったかは、それを見る人の判断によって変わるだろうが、こうした気性の激しい娘に対して、両親、あるいは母親から何らかの和解の努力があったかは、伝記的資料にはあまり明確に伝えられていない。

レーヴェントローは、女子教員資格を取得した1892年に、21歳、つまりプロイセンにおける成年に達し、その日のうちに家出を決行して、親の権威を逃れた。しかし、彼女の側からの家族や母親への心理的な結びつきを、これで断ち切ってしまったわけではなかった。故郷の喪失、そして母親との断絶を思い知らされるのは、家出から一年後の1893年、父親が死んだ時のことである。画家志望のレーヴェントローは、当時、ミュンヘン・シュヴァーピングに滞在し、絵の勉強を始めたばかりだったが、そこに父が危篤との知らせが入る。ミュンヘンから家族のいるリューベックへと長旅をしてきた彼女に対して、母親は父親の臨終の床に来ることを許さなかった。レーヴェントローは、この出来事を「父 (Vater)」(1896年)と題した小品に描いている。その作品の中で「私」は8時間かけて家に戻る。「私」は、心の中で「家へ戻るんだ!」と繰り返し叫んでいる。「母のところへ! 彼女の腕の中へ。お母さん! すずり泣きたい、お母さん! 涙でうまく話せなくてもいいでしょう — 私はこんな風に言うことが、これまで決してできなかった。」<sup>20)</sup>しかし、「私」が旅の間に思い描いた母親の像は、もろくも崩れ去る。夜半に到着した駅で、「私」は家の使いで来た僧侶から、母の伝言を知らされる。それは、「すぐに帰りなさい、お前はここにはもう何の用もないはずだ」というものだった<sup>21)</sup>。この時父親にはまだ息があったのだが、「私」が家に入ることを許されたのはそれから数日後、父親が亡くなったあとだった。

レーヴェントローの母親体験は、トラウマとして心の底に残った。1895年以降、結婚と離婚を経験し、ミュンヘンでの極貧生活がはじまる頃からつけられた日記には、母親の思い出や夢が繰り返しててくる。次にあげる夢

は、悪夢というよりはレーヴェントローの母への願望を充足してくれる夢であるが、そこにも母親との関係における苦い現実認識がにじみ出ている。「そして私はフーズムで、私の昔の部屋の自分のベットに横たわっていた。暖炉の上にある大理石のレリーフを見ていた。母が私のそばに座っていて、私たちは、私がどんなに病んでいるか話し合った。母は、私に対して実際には決してなかったような態度だった。私は彼女と一緒に窓辺に立ち、すべてがはっきり見えた。あの大きなかえでの木も、その下の石のベンチも。彼女は私に、私たちはフーズムを去らなくてはならないのよ、と話して、私を引き寄せ、お前は家で幸せだったかい、と尋ねた。私は答えた。いいえ、私は幸せになんかなれない、でも、故郷だけは持てたはずなのに。」<sup>22)</sup>

アンドレアス＝ザロメは、十代後半から家族の意思に反することであっても、自分の考えを貫き通し、二十代初めには家族から独立した生活を確立した。教会からの脱退、生まれ故郷のロシアを出て西ヨーロッパへ行くこと、哲学者パウル・レーとニーチェとの共同研究生活を計画したこと、ベルリンでのパウル・レーとの共同生活、ドイツに定住し作家活動を開始したこと— こうした彼女の人生の出だしに刻まれた節目節目に、母親との大きな対立・葛藤が生じた。レーヴェントローと同様、アンドレアス＝ザロメも、母親とは「戦闘状態」にあった。「私はママの中に、私の青春時代における、性質の似た友人を見出すことはできませんでした。彼女とは戦闘状態にあり、全く違うタイプの母親なら私にむしろ喜んで認めたような事柄を、私はことごとく戦いによって手に入れたのです。ようやく後になって、私は彼女のことを明確に、偏見無しに見るようになり、そうすると私は彼女の持つ力、誠実、そして偉大な気品がゆえに、彼女を愛するようになりました。」<sup>23)</sup>

1898年頃に書かれた、アンドレアス＝ザロメのこの手紙は、30代後半に入っていたアンドレアス＝ザロメが、母親について、また自分と母親との関

係について、新たな見方を獲得してゆく過程の一端が示されている。あとで見てゆくように、76歳の誕生日を迎える直前に亡くなったアンドレアス＝ザロメは、47歳でその短い生涯を閉じたレーヴェントローと異なり、母親との関係を成熟期から老年期にかけて考察し、かなり厳密な推敲を経た自伝的テキストに、自分の母親像を定着させている。

アンドレアス＝ザロメの母親、ルイーゼ・フォン・ザロメ(旧姓ヴィルム)は、ハンブルクの商家の出身で、その父親は製糖工場経営者だった。1823年に生まれ、1913年、90歳で亡くなっている。21歳の時、19歳年上のグスタフ・フォン・ザロメ将軍と結婚したルイーゼは、信仰に厚く、自分に対しても、他人に対しても厳しい人柄だったといわれている。結婚前に立てた「自分自身の弱さを献身によって克服する」という彼女自身の誓いが、彼女の性格を描写する言葉として、また彼女自身の言葉の数少ない記録として今日に伝えられている<sup>24)</sup>。

アンドレアス＝ザロメが晩年、70歳を過ぎて書き下ろした自伝『人生回顧』の中には、「家族の体験」という1章があり、アンドレアス＝ザロメと母親との関係を考える上で貴重な資料になっている。一見何気ないエピソードの集まりに見えるテキストだが、そのテキストの表側には、アンドレアス＝ザロメに肯定的な男性像の原型を提供した兄たちと父親の姿が織り込まれ、読者はまず、彼女を取り巻く男の家族に目を奪われる。しかし、そのテキストの裏側には、アンビヴァレントな母親の像が、同時に織り込まれていく。フォン・ザロメ夫妻はすでに5人の息子を持っていた。(そのうちの2人は幼くして死んでしまったので、末っ子として生まれたアンドレアス＝ザロメにとって重要な役割を果たしたのは3人の兄である。)6人目の子供が生まれる時、父親が娘を強く望んだのに対して、母親は「できれば半ダースの息子」の母になることを望んでいた、とアンドレアス＝ザロメは記している<sup>25)</sup>。アンドレアス＝ザロメが生まれた時、父親はすでに57歳であり、年齢的には彼女の祖父でもおかしくなかった。彼はアンドレアス＝ザロメに対

して一時に厳しく、鞭でお仕置きをすることがあっても — いたって寛大だった。母親は感情を表に表すことを嫌い、自分の夫と腕を組んで歩くことさえしない女性だった。一方、父と娘は「ちょっとしたひそやかな愛情」で結ばれていたもので、二人はそれを母親の前では隠したのである<sup>26)</sup>。1879年、アンドレアス＝ザロメが18歳になる年、父親は他界するが、その直後、彼女は信仰上の理由で、教会からの脱退を決意する。母親は、社会全体からの逸脱を意味しかねない娘の行為に「ひどく苦しんだ」が、アンドレアス＝ザロメは、父がその時生きていたならば、それを認めてくれただろう、と書いている（彼女の故郷、聖ペテルブルクのドイツ系改革教会が、そもそも父親の尽力によって設立されたものであったにもかかわらず、である<sup>27)</sup>。

「家族の体験」という自伝的テキストに描かれている母・娘関係に注目すると、母と娘が情緒的に疎遠な関係であったことが、幾つかのエピソードによって、鮮明に表現されている点が目立つけれども、同時に、娘の視点から、父親と母親の同等性が強調されている点にも注目する必要があると思われる。

まず、アンドレアス＝ザロメが、父に対する愛着と、母に対する自分の冷淡さを示す例として、わざわざ取り上げている子供時代の思い出を見てみたい。アンドレアス＝ザロメが8歳を過ぎた頃の思い出に、狂犬病騒ぎがある。彼女は学校へ出かける時、自分の家の飼い犬に手首を噛まれてしまうが、自分で適当に手当てをして、その後何も気にしなかった。ところが学校から帰ってくると、飼い犬はもういなかった。おそらく野犬から感染したのだろうが、狂犬病にかかっていることが分かり、すでに管理当局でその日のうちに銃殺されたのである。アンドレアス＝ザロメは結局大事に至らなかったが、しばらくの間発病するのではないかとびくびくしていた。その間彼女が子供心に一番心配したのは、「私はパパを噛んでしまうだろう」ということだった — なぜなら、狂犬病にかかった犬は、最初に「大好きな主人」に襲い掛かると聞いていたからである<sup>28)</sup>。父親は「一番好きな人」だったの

だが、老年のアンドレアス＝ザロメは、当時を振り返り、「私は母よりも父が好きだったということは、まったく意識していなかった」と述べている<sup>29)</sup>。

子供の頃、自分が父親と母親のどちらを優遇していたかを明言するかわりに、子供時代に「意識的なこと」の役割がいかにかさいかを、アンドレアス＝ザロメは次のエピソードによって示そうとする。それは、夏によく母と出かけた海水浴での思い出。水の中ではしゃいでいる母親に向かって、子供のアンドレアス＝ザロメが「ねえ、お母さん、ちょっとおぼれてごらんよ！」と言うと、母親は楽しそうに笑いながら「だってお前、そうしたら死んでしまうじゃないか！」と答えたのだが、これに対して娘は「かまわないよ！」と叫んだのである<sup>30)</sup>。

アンドレアス＝ザロメと母親の関係に、よそよそしさがあったことは明らかだが、それはなにも、娘の側が意図的に父親と母親とを区別した結果ではなかったようだ。彼女自身の言葉によれば、「心の中で両親を区別したことはなかった」のであり、父親が母親に対して「繊細な騎士的態度」でもって敬意を表現していたのが、子供たちにも影響し、「母は決して『父の下で』尊敬されたのではない」という<sup>31)</sup>。母と娘の溝は、おそらく、娘が父に対するのと同様に、母に対しても開放的で親密な態度を取った時に、かえって深まったのである。母親への口のききかたを、母親に咎められた時、おもわず体がこわばってしまった、という娘時代のアンドレアス＝ザロメのエピソードは、そのことを示唆しているように思われる<sup>32)</sup>。

いくつかの連鎖するエピソードそのものは、鮮明な像を伝えているにもかかわらず、アンドレアス＝ザロメは、母に抱いていた感情を、断定的、否定的に述べることは決してしていない。そこに、アンドレアス＝ザロメと母親との関係が、二律背反的で、複合的であったことが暗示されている。

いわばお父さん子だったアンドレアス＝ザロメが、母親への理解を深めたのは、すでに触れたように、30代に入ってからのことである。「家族の体

験」のしめくりは、晩年の母親の生活の様子に捧げられており、ドイツとロシアの間でお互いを訪問しあいながら、アンドレアス＝ザロメが、母のやさしさ (Mütterlichkeit) を発見する過程が描かれている<sup>33)</sup>。(アンドレアス＝ザロメは、1年から1年半に1度は、ロシアの母親を訪問していた。)

アンドレアス＝ザロメは、自分が母親にとって「理想的な娘」にもならず、また社会習慣に極端に反した時でも、母親は、非常に苦しみながらも、「信頼」を失うことはなかった、と書いている。悪意に満ちた誤解が娘に及ばないよう、母親は、自分と娘が理解しあっているという印象を他者に与えるよう努めていた。「私がすばらしい青春を外国で過ごしている間、私はこのことにまったく気づいていなかった。このような母のやさしさは、どれもあまりにひそやかだったので、私の意識に残ったのは、ほとんど、どれほど断固とした非難を込めて、深い確信から反対して、私の母が私の考え方と生き方に、私に対して意見したか、ということばかりだった。その結果、エゴイスティックにも私は、後悔にも、ホームシックにも全く襲われずに済んだのである。」<sup>34)</sup>母親が、娘との問題に他人を巻き込まず、直接娘と対決したことが — 逆説的ではあるが — 娘の独立を促し、しかも、娘との関係を崩壊させずに済んだ要因かもしれない。少なくとも、娘であるアンドレアス＝ザロメの視点からは、そのような母・娘関係が再構成されている。

アンドレアス＝ザロメの母親が、娘に体をすりよせて情愛を伝えたのは、アンドレアス＝ザロメが母親が亡くなる前にした、最後のロシア訪問の時だった。帰国のため明け方に家を出る娘を見送りに、寝巻きのまま起きてきた母親は無言で娘の体に身を寄せる。テキストは「ああ、なぜ、なぜ今頃になって！」という、痛々しい娘の言葉を伝えて終わっている<sup>35)</sup>。母と娘 — 両者の間の壁が取り払われ、友人同志のように抱き合うことは、アンドレアス＝ザロメにとっては母の死の直前にしか、また、レーヴェントローの場合、夢の中でしか実現しなかった。

## 2. 「母性」への回帰？

レーヴェントローとアンドレアス＝ザロメは、母親との葛藤と断絶を一度経た後に、それぞれ別の方法で、母性の問題に回帰した。レーヴェントローは、息子ロルフに自分の受けることができなかつた愛情を注ぐことで、みずからのトラウマを克服してゆくように見える。レーヴェントローの初めての長篇小説『エレン・オレスチュルネ (Ellen Olestjerne)』(1903年)は、著者自身の半生を下敷きにした自伝的小説であり、主人公の女性エレンが、母親からの罵りと体罰を絶え間なく受けた不遇な子供時代から、反抗的少女時代、家出、家族との決定的断絶を経て、一人で子供を産むまでの過程を追っている。小説の結末部には、出産直後の主人公の次のような言葉が記されている。「私の子供 — 長く、暗い眠りから目覚め、この子は昼も夜も私の隣にいる — 昼も夜も、今や太陽が輝いている、そして最後の暗闇にも光りが射した — 世界は静かに私たち二人を取り巻いている、まるであらゆる啓示が鳴り響く寺院のように。」<sup>36)</sup>

一方、アンドレアス＝ザロメは、自分自身が子供を産むことを「冒険 (Wagnis)」だとして、意識的に避けた<sup>37)</sup>。しかしながら、彼女は小説、エッセイ、論文を通じて、苦悩と矛盾をすべて受け入れつつ、献身的に、すべてを与えることができる女性像、ないし母親像を積極的に形成してゆく。「女性としての人間 (Der Mensch als Weib)」(1899)、「エロティック (Die Erotik)」(1910)などのエッセイ、『母 (マ) ある肖像 (Ma. Ein Porträt)』(1901)、『家 (Das Haus)』(1921)などの小説は、女性と自然、女性と生の全体性との結びつきを強調したアンドレアス＝ザロメの、一見保守的な女性観を検討する上で重要な作品となっている。実際、彼女の母親像は、極めて保守的な陣営に好ましく映ったようである。たとえば、1938年に発表された、ナチズムの母性賛美と人種イデオロギーの影響を受けたある

研究論文の中で、『母 ある肖像』の主人公の母親が体现している「母性」は、「まさに理想的」だと評価されている。19世紀末の女性運動が過ちだったと断じ、ナチ時代における母親賛美への回帰を歓迎するこの著者は、アンドレアス＝ザロメの描いた小説の母親像に対して、「こうして〔女性〕解放運動は乗り越えられ、女性は正しい道に戻った」と、解説している<sup>38)</sup>。

自由、自己決定、自己実現に根拠をおいた、主体的な生き方を求めたレーヴェントローとアンドレアス＝ザロメは、結局、母性神話を再生する反動的作家に過ぎなかったのか。これが二人を評価する上で矛盾を帯びた問題として浮上する。さらに、彼女らと女性運動との関係も、単純な対立関係として捉え切れない部分がある。というのも、急進的な男女同権主義とは路線を異にする市民女性運動の主流派においては、ゲルトルート・ボイマーやヘレーネ・ランゲなどの代表的女性たちが、「母性」というアイデンティティを女性に与えることで、女性の社会的地位の向上を図ろうとしていたからである。二人の女性作家たちと、特定の女性運動家たちの間には、実は共通点があるのだろうか。

両者の共通性と相違を明らかにするには、「母性」や「母親の役割」あるいは、「女性の役割」が、それぞれ厳密に定義される必要があるだろう。また、女性運動に関与した者とそうでない者とが、実践面において、「母性」とどのように関わっていたか注意を払う必要がある。それをしなければ、小説の主人公が、家族への愛と献身という、近代市民社会における母性イデオロギーの特色を備えているという事実だけで、作者が特定の女性像（ここでは「母」）を、女性のアイデンティティとして祭り上げた、という短絡的判断が生じかねない。特に、同じ小説の中で、母親とは意見を異にする他のタイプの女性たちが登場する場合、「母」という女性像は、登場人物同士の相關関係において初めて、その意味合いが検討されなくてはならないだろう。

レーヴェントローとアンドレアス＝ザロメが女性運動にどのような距離を置いていたかは別として、彼女たちが少女時代から自我を確立してゆく過程

において、母親の問題が重くのしかかっていたという事実は、彼女たちの時代における「母親」の役割を引き受ける女性が、いかに重要視されていたかを物語っている。家政と家庭教育における母親の役目の重要性は、今日においても議論され続けている。それは、今日の家族観が、19世紀的な近代家族観の枠組みから、いまだに大きくは逸脱していないことを示しているかのようだ。バダンテールが『母性という神話』という論争的な著書によって明らかにしたように、18世紀以降の言説で力説されるようになった母の子供に対する慈愛は、「自然」によって女性に与えられた「本能」とはとても言い切れない。時代と所属する社会層によって、母の子に対する感情は「多様」かつ「偶発的」であるからだ<sup>39)</sup>。

姫岡とし子氏の記述に従えば、ドイツにおける家族概念の転換期は18世紀から19世紀初頭にあたる。産業構造の変化によって、生産と消費、住まいと労働が分離したことにより、家族は、従来の奉公人を含む家族構成から、夫婦と未婚の子供を中心にした構成に変貌し、社会（公領域）と家族（私領域）の分離、男性と女性の性格規定における「両極分化」が進んだ<sup>40)</sup>。こうして成立した「近代市民家族」という概念のもとでは、「男性は強く、逞しく、自立的、攻撃的、能動的、理性的性格をもつのに対し、女性はいか弱く、優しく、生まれながらにして依存的、防衛的、受動的、情緒的な存在というイメージが定着していく。その結果、家庭を守り、子供を養育するという妻・母役割を女性の『天職』とみなす理念が成立した。」<sup>41)</sup>しかし、このような受動性を特徴とする女性のイメージは、わずかの期間のうちに微妙な変化を遂げ、1860年代には、ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマンにおけるような、女性の活動を家庭から社会へと広げる議論が始まってゆく。つまり、シュラーダー＝ブライマンは、女性の「暖かい愛情でわが子を包んで保護するという資質は家庭内だけではなく、社会でも必要とされており、したがって母親が家庭内で果たしている役割をそのまま社会にもちこんで多数の子供たちの教育に役立てることもできるし、自分の子供を産んでいない

女性も母性的資質を社会のなかで発揮することは可能だと考えた。』<sup>42)</sup>「身体的母性」とは区別される、この「精神的母性」は、女性の教職への進出を強く主張したランゲや、女性を「国民共同体」の一員として位置づけようとしたボイマーたちのブルジョア女性運動穏健派に、女性の社会進出を正当化するための理論的基盤を与えている<sup>43)</sup>。女性ならではの特質とされる「母性」による社会活動は、女性の家庭での役割を「延長」したものと理解されたため、市民社会における男女の役割規範に基本的には抵触しない。男女同権・平等を旗印にするのではなく、「男女の異質性」を出発点にした穏健派は、やがて国家の膨張主義に親和性を示し、ナチズムへ傾斜してゆくが、「社会」や「国家」へ女性を統合することを重視するあまり、個々の国家体制そのものを批判的に見るができなくなっていた<sup>44)</sup>。

母性による全体への奉仕というブルジョア穏健派における理念ほど、アナキーなボヘミアンだったレーヴェントローにとって遠いものはなかっただろう。彼女の日記には、息子への無条件の愛情を表現した記述がおびただしく見られる。しかし日記は、息子への愛に劣らず、男性たちとの関係、愛と官能の世界が彼女の人生にとって大きな位置を占めていたことを示しており、「母性」は、レーヴェントローにとって一つの愛の形ではあっても、彼女のアイデンティティを保証したかどうかは疑問である。しかしながら、彼女と母親との関係において、レーヴェントロー自身が「母の愛」という近代的母性イデオロギーに染まっており、そのイデオロギーと現実とのギャップに苦しんだとは言えるかもしれない。

また、アンドレアス＝ザロメが母親ルイーゼを描写する時、そこにルイーゼの体現する女性性・母性への敬意と賞賛は感じられるが、アンドレアス＝ザロメは必ずしも、容易に母を同一化のモデルにすることはできなかったと思われる。「家族の体験」というテキストに今一度目を向けてみたい。性格の違いにもかかわらず忠実な愛によって結ばれていた両親にとって、自分自身の性格の一面的な偏りに陥らないことは、重要なことだった、と述べられ

たあと、「これは母のような性格の人にとっては、おそらく、その自立した、活動的性質を、遠慮会釈なく女性性と母性に帰してしまうことを意味していた。その尊厳はとどのつまり神によって与えられていたのだから。」<sup>45)</sup>とアンドレアス＝ザロメは記している。彼女と母ルイーゼの最も大きな違いは、「彼女 [=母] はいつでも義務感と確信的自己犠牲を出発点にしたこと、つまり、何らかの意味で、英雄的傾向から行動したこと」にあるが、この母親の「男性的素質」が、「彼女の女性性を、知らぬ間に、そして矛盾なく、可能ならしめた。」<sup>46)</sup>矛盾や分裂を免れた両性の要素の統合は、アンドレアス＝ザロメにとって、理想的、ユートピア的存在の象徴であることは、すでに述べたことがあるが<sup>47)</sup>、「家族の体験」は、そのような人間の理想像を思い描くに至るまでの、娘・女性としてのアイデンティティ形成の困難が示唆されている。フロイトは「ノイローゼ患者の家族物語」の中で、「小さな子供にとって両親は、はじめは唯一の権威であり、あらゆる信仰の源泉である。両親 — つまり自分と同性の親 — と同じになる、父や母のように大きくなるということは、子供時代における、もっとも熱烈かつ重要な願望だ」と、述べているが、明らかに娘よりは、息子とその父親との関係に比重が置かれたフロイトの、「近代的家族」の枠組みで構築された親子関係モデルは、同性の親子の直線的系列しか基本的には問題としておらず、アンドレアス＝ザロメの提示した問題 — 娘と両性の親との関係 — は、ほとんど視野に入っていない<sup>48)</sup>。「家族の体験」におけるアンドレアス＝ザロメは、複数の兄と父母、という家族関係の中における、娘の自我の形成を再構築しており、男性性の分散、および女性的権威としての母を取り込んだ「家族物語」（つまり「父」を唯一神として位置づけるフロイトの家族構造とは対立的な構図）をテキストにしているのである。

肯定的男性像をアンドレアス＝ザロメに植え付けた3人の兄たちについて、まず、彼女はこう言っている。「のちに、彼らと同じ生まれだ、という考えが私を心底安心させることになった。たとえそれが、私自身、時々問題

に思えたとしても。』<sup>49)</sup>アンドレアス＝ザロメが同一化できる対象は、まず男のきょうだいであり、女性ではなかった。しかし、兄たちが父親の命令に従って、医者や技師になったのに対し、アンドレアス＝ザロメを何らかの職業に押し込める強制はなかった。父の娘に対する寛大さは、娘にとっての人生の目標の不在を意味していたかもしれない。学校でロシア語の授業についてゆけなかったアンドレアス＝ザロメに、父親は笑いながら「彼女に義務教育は必要ない」と言って、授業はただ聴講すれば良いことになったのだが、彼女は「彼がどこからそのような優しい偏見を持つようになったのか、私は知らない」と、付け加えている<sup>50)</sup>。さらに、母親にとって彼女は望まれて生まれた娘ではなかった — 「この娘はすでに、息子として生まれてこなかったために彼女 [=母] をがっかりさせていたのだから、せめて母の理想的娘になるよう努力すべきだったところ、まさにその反対になってしまった。』<sup>51)</sup>

家族の誰とも結局のところ、感情的・心理的に強くは一体化できなかったアンドレアス＝ザロメは、特に両親との関係について「自由」という言葉を用いている。「結びつきも対立も、ある限界を超えることはなく、その限界のうしろには、なにか自由な空間があった。』<sup>52)</sup>息子ではなく、娘として生まれたことは、彼女にとって何を意味していたのだろうか。フロイトが提示したような、父を同一化と乗り越えの対象とする息子のような、競合関係における主体の形成とは違った、主体の形成が、彼女にとって問題となってくる。「私にとって、戦いは問題ではなかった」と彼女は記している — 「私が望んだり、期待したものであっても、私は、第一級の物事を巡って戦ったわけではない」「というのも、私にはこう思えたからだ。最も美しく、最も価値あるものは、それが、贈り物であって、獲得物ではないからだ。」「感謝の気持ちを持つことが許されること。これが、おそらくなぜ私が、あらゆる闘争的な印象にもかかわらず、やはり娘であって、息子にならずに済んだ理由だろう。」(強調はすべて原文)<sup>53)</sup>先に引用した著者が30代の時に書いた手紙

における「戦い」のニュアンスとは、明らかに異なる「贈り物」という言葉が、父系だけでなく、父系と母系の双方と対決せざるを得なかった娘の主体形成に与えられた定式である。父系と母系、男性性と女性性の融合という、ポジティブな印象の影に、男性的アイデンティティと女性的アイデンティティの両極に引き裂かれて苦しんだ過程が隠れている。

最後に、レーヴェントローとアンドレアス＝ザロメの個人史を比較することによって、何が言えるのか考えてみたい。レーヴェントローの場合、母親によって親子の関係が完全に閉ざされてしまったのに対し、アンドレアス＝ザロメの場合、母親と娘の回路が残った点が大きく違っている。レーヴェントローが、娘の側からの一方通行的な愛と苦悩を吐露するしかなかったのに対して、アンドレアス＝ザロメは、母親との交流をもとに、文学的営為を通じて母親の立場を理解し、母という形象に言葉を与える試みをしている。マリアンネ・ハーシュは、その著書『母と娘の物語』の中で、女性作家による文学の解説に、先に触れたフロイトの「家族物語」という概念を援用し、母と娘の新たな関係モデルを模索しているが、彼女はその際、ギリシャ神話にあるデメーターとペルセポネーの物語を、女の結びつきのモデルとして前面に押し出している<sup>54</sup>。それは父権的権力の介入によって一旦分断された母と娘が、周期的に再会し、娘が夫と母の間を、つまり父権的世界と母権的世界との間を往来して、どちらに対しても愛と忠誠を維持するというものだが、そこには娘がどちらかの権力に屈従して、直線的に破滅への道を歩くのではない、矛盾を包括しつつ生き延びるためのモデルが表現されている。このようなモデルを念頭において、アンドレアス＝ザロメの著作に目を向けてみると、彼女の「家族の体験」に描かれた母と娘の関係には、デメーター神話に共通する親子関係がすでに示されているように思う。彼女はまた、1910年に発表した「エローティック」というエッセイで「母性」という1章をさいており、そこで「母性のクライマックス」が、まったく独自のもの、他者そのものを、意識的に外へと出すことにある、と述べ、さらに、母親自

身の生み出した生と、母親が一体にはなれないことに力点を置いた後で、「まったく新しい同盟をもとにした場合は別であるが」と付け加えている<sup>55)</sup>。母と子の有機的統一は、避けることのできない分断を経た後で、初めて実りある関係へと発展しうる、というモデルが、母性についての考察から引き出されている。

レーヴェントローやアンドレアス＝ザロメの母親像や、母性に関する言説が、女性にとって抑圧的に働く「母性崇拜」の言説に容易に取り込まれることは、すでに示唆した。「母性」についてオープンに論じることを不可能にするこのメカニズムについて詳しく考察することなしに、彼女たちの母性論の是非を確定することは難しい。しかしながら、男女の両極分化に刻印された近代的家族論の枠内で、母性的イメージをもとにした、一つの間関係のモデルを提示し、母と娘の系譜を文学的営為の中で問題化しえた、という点では、レーヴェントローよりも、アンドレアス＝ザロメにより注目すべきかもしれない。ただし、アンドレアス＝ザロメの構想した、主体における父系と母系の融合は、父系にも母系にも与しない「自由」を同時に意味しており、近代的家族構造の枠組みを超えて、孤独な個人の創造性による主体形成を要求しているようにも思われる。

[付記]本稿は、1996年5月12日に行われた日本独文学会春季研究発表会(於明治大学和泉校舎)シンポジウム「母—娘—関係 — 世代間の対立か、あるいは共生か」における口頭発表原稿に加筆したのものである。

## 註

- 1) 「母娘関係」に着目した文学研究の主要文献については以下を参照のこと。  
Müller, Heidi Margrit: Töchter und Mütter in deutschsprachiger Erzählprosa von 1885 bis 1935. München: Iudicium, 1991. S. 19-26. (1.2.4. Literaturbericht); S. 396-399. (4.4. Literaturwissenschaftliche Studien über die Tochter-, Mutter-,

Vater- oder Frauendarstellung).

- 2) Vgl. Ebd. S. 9. (Anm. 1).
- 3) Ebd. S. 12. Siehe auch Anm. 6. (ミュラーが念頭に置いている各作家の作品は次のとおり。Theodor Fontane: Mathilde Möhring; C. F. Meyer: Die Richterin; Joseph Roth: Der blinde Spiegel; Arthur Schnitzler: Therese. 例外的に著名な作品としては Fontane: Effi Briest; Thomas Mann: Buddenbrooks.)
- 4) Luce Irigaray: Die Notwendigkeit eines geschlechtlich differenzierten Rechts. In: dieselbe: Genealogie der Geschlechter. Aus d. Franz. von Xenia Rajewsky. Freiburg (Breisgau): Kore, 1989. S. 15–24. Hier S. 19.
- 5) アンドレアス＝ザロメとレーヴェントローの詳しい伝記は以下の文献を参照のこと。Welsch, Ursula/ Wiesner, Michaela: Lou Andreas-Salomé. Vom „Lebensurgrund“ zur Psychoanalyse. 2., durchgesehene Auflage. München; Wien: Verlag Internationale Psychoanalyse, 1990. (1. Aufl. 1988); ヘルムート・フリッツ (香川檀訳) 『エロチックな反乱 フランチスカ・ツー・レーヴェントローの生涯』筑摩書房 1989年 [dt. Originalausgabe: Fritz, Helmut: Die Erotische Rebellion. Das Leben der Franziska Gräfin zu Reventlow. Frankfurt/M.: Fischer, 1982.]  
男性 (夫) の系譜への帰属に関して言えば、アンドレアス＝ザロメの場合、26歳 (1887年) で結婚した東洋学者 F.C. アンドレアスとの間には性的関係がなかったと言われる。両者の間に子どもはない。彼女の場合、30代後半から婚外に結ばれた複数の男性関係がしばしばとりざたされた。レーヴェントローも23歳 (1894年) で司法官試補ヴァルター・リュベケと結婚するが、ミュンヒェン・シュヴァービングで画家修行をする間に、いわゆる「姦通」を繰り返したことが原因で、結婚後二年で離婚に至る。26歳 (1897年) で男子を出産するが、生涯父親の名前は明かさなかった。二人とも、モノガミーと妻の貞節を基盤にした市民的性道徳に照らしてみれば、型破りな女性たちだったと言えるだろう。
- 6) Vgl. z. B. Gnüg, Hiltrud: Erotisch-emanzipatorische Entwürfe. Schriftstellerinnen um die Jahrhundertwende. In: H. Gnüg; Renate Möhrmann (Hrsg.): Frauen-Literatur-Geschichte. Schreibende Frauen vom Mittelalter bis zur Gegenwart. Stuttgart: Metzler, 1985. S. 260–280.
- 7) Andreas-Salomé, Lou: Ketzereien gegen die moderne Frau. (Aus: „Die Zukunft“, Jg. 7. 1898/99, Bd. 26, S. 237–240.) In: E. Ruprecht/D. Bänsch (Hrsg.): Jahrhundertwende. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1890–1910. Stuttgart: Metzler, 1981. S. 566–569. Hier S. 567.
- 8) Reventlow, Franziska Gräfin zu: Viragines oder Hetären. In: dies: Autobiographisches. Novellen, Schriften, Selbstzeugnisse. Hrsg. v. Else Reventlow. Frankfurt/M.; Berlin: Ullstein, 1986. S. 236–249. Hier 248.
- 9) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. Grundriß einiger Lebenserinnerungen. Aus dem Nachlaß hrsg. v. E. Pfeifer. Frankfurt/M.: Insel, 1968. S. 47.
- 10) Reventlow, Franziska Gräfin zu: Briefe 1890–1917. Hrsg. v. Else Reventlow. München; Wien: Langen-Müller, 1975. S. 15. [1890年4月16日]

- 11) Ebd. S. 16. [1890年4月19日]
- 12) Ebd. S. 11. [1890年3月]
- 13) Ebd. S. 28f. [1890年4月27日]
- 14) Ebd. S. 36. [1890年5月4日]
- 15) Ebd. S. 38. [1890年5月8日]
- 16) Rantzau, Johann Albrecht von: Zur Geschichte der sexuellen Revolution. Die Gräfin Franziska zu Reventlow und die Münchner Kosmiker. In: F. Wagner (Hrsg.): Archiv für Kulturgeschichte. 56. Bd. Köln; Wien: Böhlau, 1974. S. 394-446. Hier S. 401.
- 17) Ebd.
- 18) Ebd.
- 19) Ebd. Siehe auch: Reventlow, Franziska Gräfin zu: Briefe 1890-1917. S. 154. [1890年11月29日]
- 20) Reventlow, Franziska Gräfin zu: Vater. In: dies: Autobiographisches. Novellen, Schriften, Selbstzeugnisse. S. 73-77. Hier S. 73f.
- 21) Ebd. S. 75.
- 22) Reventlow, Franziska Gräfin zu: Tagebücher 1895-1910. Hamburg; Zürich: Luchterhand, 1992. S. 61. [1897年6月23日]
- 23) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. S. 226. (Anm.)
- 24) Ebd.
- 25) Ebd. S. 47. (“Erleben an der Familie” S. 43-58.)
- 26) Ebd.
- 27) Ebd. S. 46.
- 28) Ebd. S. 49.
- 29) Ebd.
- 30) Ebd. S. 49f.
- 31) Ebd. S. 50.
- 32) Vgl. ebd.
- 33) Ebd. S. 55.
- 34) Ebd. S. 55f.
- 35) Ebd. S. 58.
- 36) Reventlow, Franziska Gräfin zu: Ellen Olestjerne. Roman. Frankfurt/M.: Fischer, 1985. S. 233.
- 37) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. S. 36. („Liebeserleben“ S. 27-41.)
- 38) Vgl. Müller, Heidi Margrit: Töchter und Mütter in deutschsprachiger Erzählprosa von 1885 bis 1935. S. 21.
- 39) E. バダンテール『母性という神話』(鈴木晶 訳) 筑摩書房 1991年。361頁。
- 40) 姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房 1993年。22頁参照。
- 41) 同書, 同頁。

- 42) 同書, 25頁。
- 43) 同上参照。
- 44) 同書, 149-181頁 (第6章「ワイマール時代の女性運動とナチズムへの対応」参照。
- 45) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. S. 50.
- 46) Ebd. S. 56.
- 47) 拙論「象徴としてのMann/Weib — ルー・アンドレアス＝ザロメのエッセイ『女性としての人間』に関する一考察」所収『探究 ドイツの文学と言語 — 立川洋三先生定年退職記念論文集』東洋出版, 1995年。121-142頁。
- 48) Freud, Sigmund: Der Familienroman der Neurotiker (1909 [1908]). In: ders.: Studienausgabe. Bd. IV. Psychologische Schriften. S. 221-226. Hier S. 223. (日本語訳「ノイローゼ患者の出生妄想」浜川祥枝訳 所収『フロイト著作集 第十巻』人文書院, 1983年。135-138頁。)
- 49) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. S. 43.
- 50) Ebd. S. 48.
- 51) Ebd. S. 55.
- 52) Ebd. S. 48.
- 53) Ebd. S. 56f.
- 54) マリアンネ・ハーシュ『母と娘の物語』寺沢みづほ訳 紀伊国屋書店 1992年。18-20頁参照。
- 55) Andreas-Salomé, Lou: Die Erotik. Vier Aufsätze. Hrsg. v. E. Pfeiffer. („Die Erotik“ S. 83-145.) S. 121f.

(ひろさわ・えりこ 商学部専任講師)